主日礼拝
２０２３年11月１２日（日）
題　「永遠に存在する方」
テキスト：ヨハネによる福音書８章４８～５９節

皆さま、おはようございます。秋になると思い出す詩があります。
オーストラリアの詩人ライナー・マリーア・リルケの「秋」という詩です。
今日の週報の最後に載せています。読んでみます。

「秋」　ライナー・マリーア・リルケの詩
木の葉が落ちる　落ちる　遠くからのように　天上のはるかな庭が　枯れていくかのように
落ちる　否定する身ぶりで　そして夜には　重い地球が落ちる
すべての星々を離れて　孤独の中へ
私たちみんなが落ちる　この手が落ちる　ほかの人を見ても　みんな同じだ
でもこの落下を　限りなくやさしく　その両手に　受けとめてくれる存在がいる

この詩の最後の「でもこの落下を　限りなくやさしく　その両手に　受けとめてくれる存在がいる」
との言葉は、わたしたちがたとえどこに行っても　どのような状態になっても
愛なる神様が共にいてくださって、受け止めてくださるのだと理解して、心強く思わされるのです。

さて、今日の聖書の個所はイエスをに反感を持つ、約２０００年前のユダヤ人たちとイエスとの激しい論争の場面です。わたしたちは、すべてのユダヤ人がイエスに反感を持ち、陥れようとしたわけではないということをまず知っていおかなければならないと思います。約２０００年前当時、ユダヤ社会を支配していたユダヤ教の一部の人々がイエスを排斥したと言えるでしょう。

◆アブラハムが生まれる前から「わたしはある」
48:ユダヤ人たちは、「あなたはサマリア人で悪霊に取りつかれている
と、我々が言うのも当然ではないか」と言い出します。イエスはイエスに反感を持つユダヤ人たちから、当時ユダヤ人が軽蔑していたサマリア人で悪霊に取りつかれていると悪口を言われていたのです。ちなみにサマリア人は、紀元前７００年代に、アッシリア帝国によって陥落し占領者の移民政策によって他民族との雑婚を強いられ異教化したと思われていたようです。多くのユダヤ人はサマリア人を軽蔑していたのです。
イエスは、これに対して黙っておられませんでした。毅然とした態度で反論さ

れたのです。
　イエスはきっぱりと言われました。
49:イエスはお答えになった。「わたしは悪霊に取りつかれてはいない。
　わたしは父を重んじているのに、あなたたちはわたしを重んじない。
50:わたしは、自分の栄光は求めていない。わたしの栄光を求め、裁き
　をなさる方が、ほかにおられる。
イエスは自分は悪霊に取りつかれてないと言われ、父を重んじていることを示されたのです。ここで「父」とは天と地をお創りになった神さまのことです、
イエスはこの方を、ユダヤのことばで「おとうちゃん」を意味する「アッバ」と呼んでおられたと言われています。また、自分は自分の栄光を求めていないこと、本来、栄光は神さまだけのものです。しかし、人間は、栄光とは、自分の評判が高まることと受けとり理解するようになったのだと思います。「裁きをなさる方が、ほかにおられる。」とはこれは天の父なる神さまのことです。
51:はっきり言っておく。わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」「はっきり言っておく。」とは、以前も学びましたが、「アーメン」ということばで大切なことを語る前にイエスは使われたのです。
また「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死ぬことがない。」とは、
抽象的感じで少し分かりにくい気もしますが、イエスのことばを守る人は、
たとえ肉体は死んでも、その心、魂は死ぬことはないということです。救い主であるキリスト・イエスと、神と共に生きるという希望があるのです。これを信じることのできる人は幸いだと思います。
これに対して、その時イエスを取り囲んでいたユダヤ人たちは、激しい怒りを増して行ったのです。 52:ユダヤ人たちは言った。「あなたが悪霊に取りつかれていることが、
「 今はっきりした。アブラハムは死んだし、預言者たちも死んだ。」と。
ところが、あなたは、「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死
を味わうことがない」と言う。そして、イエスが悪霊に取りつかれていると決めつけます。彼らは、旧約聖書に出てくる、当時イスラエル民族の「信仰の父」と呼ばれたアブラハムも、また神の言葉を語った預言者たちも、死んだのに、イエスが「わたしの言葉を守るなら、その人は決して死を味わうことがない」と言ったことが理解できないばかりが、神を冒涜することだと怒ったのです。
この怒りが燃え上って遂にイエスを十字架の死へ追い込んで行ったのです。
重ねて、ユダヤ人たちは、
53:「わたしたちの父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。彼は死んだではないか。預言者たちも死んだ。いったい、あなたは自分を何者だと思ってい

るのか。」とイエスに対して「自分を何さまだと思っているのか」と厳しく迫って行ったのです。怒りに心を支配されている人々に対して、イエスは冷静に語られます。
54:イエスはお答えになった。「わたしが自分自身のために栄光を求め
ようとしているのであれば、わたしの栄光はむなしい。わたしに栄光を与えてくださるのはわたしの父であって、あなたたちはこの方について、『我々の神だ』と言っている。」と。
ここでイエスは、自己栄化、自分で栄光を手に入れるというのはなく、あくまで神がイエスに栄光を与えてくださるということをことを語っているのです。
そして、
55:あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしが
その方を知らないと言えば、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。
しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。神とイエスとの深い緊密な交わりを語られています。

それから 56 節では、「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」とさえ言われました。
これは、信仰の父アブラハムも子なる救い主キリストがこの世に来ることを願っていた、楽しみにしていたのだと受け止めて良いと思われます。今をそれを見て、喜んでいるのだと語ったのです。ここには、旧約聖書の創世記にあるアブラハムと息子イサクの出来事が関係していると思われます。その出来事とは、アブラハムは神の命令に従い、モリヤの山で、わが子イサクを神に捧げようとしたとの出来事です。
モリヤの山とは、エルサレム町のある丘です。アブラハムは神の言葉に従い、我が子イサクを神に献げようとしたのです、ちょうどその時、神からアブラハムにストップの声がかかったのです。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」との声をアブラハムは聞いたのです。そしてアブラハムがまわりを見ると木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていたので、彼は息子イサクの代わりに、その雄羊を神に捧げたのです。
その場所は、ヤーウェ・イルエ「アドナイ・エレ」、「主の山に、備えあり」と呼ばれ、この感動的な話はイスラエルで長く伝えられて来て聖書の最初の書物である創世記に留められたのです。
この出来事は、イエスの十字架の死と重なっているように思えます。

神とアブラハム、イエスとイサクが対応しているとさえ言えるでしょう。神はご自身の愛する独り子イエスが十字架につけられるがままに、人間に任されたのです。イエスは人間のすべての罪を背負い、人間を始め、全被造物の罪からの救いのために裁きの十字架の死を遂げられたのです。そして、神によって復活させられ、今もわたしたちの目には目ませんが生きておられるのです。

　今日の聖書個所の５８節には、「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、「わたしはある。（エゴーエイミ）」とのイエスの言葉があります。

「わたしはある。」これは理解するのに難しい言葉ですが、神学的には「キリストの先在」と言われ、「過去・現在そして未来に渡って共にいる。」という意味です。神の独り子なる救い主キリストは、人間イエスとして地上に来る前から、永遠の昔から父なる神と共にいた。「先にいた。先にあった。」ということです。そして、これから先もイエス・キリストは永遠に共におられるということを表しているのです。この救い主キリストが受肉しナザレのイエスとなったのです。みなさん、愛なる創造主なる神さまと、御子イエス・キリスト、そして慰めを与えてくださる聖霊は、昔も、今も、そしてこれから先も、
共にしてくださるのです。わたしたちが、どのような苦しみにあったとしても、たとえこの世で死の時を迎える時も、神と主イエスは、その両手で限りなくやさしく受けとめてくださるのです。

　わたしたち、それぞれに残されているこの地上で神に感謝し賛美しながらがら歩みたいと願います。